

教育研究体制に関する貴重な実験

7代所長 岡本舜三



生産技術研究所の生い立ちは第二工学部と切り離しては考えられない。大東亜共栄圏の建設という国策を遂行するには多数の技術者が必要であり、その養成には既設の工学部の拡張では足りない。いっそのこと東大に工学部と同質同規模の新工学部を設置するのがよいとのお考えから新工学部が西千葉に開設された。そして在来の工学部は第一工学部、新設の工学部は第二工学部と名付けられた。それは昭和17年4月のことであった。多数の俊秀が東大工学部を志願してきたが、合格者は応用数学教室で考案された原理によって両工学部に学力上の格差を生じないように公平に配分され、その結果421名が第二工学部に入学した。銀杏並木に憧れて東大を志願した学生諸君の中には芋畑に囲まれた木造校舎に不運を託った人も多かったが、やがて戦争が酷わとなり

厳しい食糧不足が訪れると芋畑の恩恵に感謝するという笑えぬ話もあった。

苛烈だった戦は終わって荒れはてた山河と焼土と化した都市だけが残った。われわれはこの荒廃から立ち上がるには工業立国しかない信じ、第二工学部を守って祖国の復興に努力しようと希ったのであるが、日本はデンマークを手本に、農業国として再生するのだという勝者に阿ねた人達の意見が通って、第二工学部は廃止ときまった。この間に、瀬藤、兼重、星合の諸先生はじめ幹部の先生方の血の滲むご尽力があって、ようやく研究所への転換が認められ、昭和24年5月31日に「生産に関する技術的問題の科学的総合研究並びに研究成果の実用化試験を行う」ことを目的として生産技術研究所が誕生した。失業救済研究所などという周辺の悪事も意に介せず、われわれはひたすら研究に精進し、爾来30年、今日ではわが国最大の大学附置研究所として工学界に重きをなすに至った。誠に同慶に耐えないところである。

思えばこの30余年間におきた第二工学部と生産技術研究所の設置は、わが国の高等教育研究史上注目すべき実験であった。はじめに第二工学部についてみるに、先に述べたように、両工学部には両者の学力が均等するように慎重に学生が配分された。しかし彼等を受け入れる学部側には、教育内容においてできるだけ同質のものであることを期しながら、実際には著しい相違があった。第一、第二両工学部とも名誉ある東京帝国大学工学部の伝統を継いでいるが、前者は伝統の地本郷にあって総合大学の一面をなし輪奐の美を誇っているのに対し、後者は千葉市西郊の芋畑に新築された木造校舎で強風時には黄塵が一面に舞い上がる有様であった。また教官陣は前者が当代の碩学を擁しているのに対し、後者は一般に年令が若く、また学外からの転入者も多かった。ただ実際には前者の教授が多数講師として後者にも出講されたので、見かけほどの差はなかったが、それでも終日接している専任教官の肌合には両者異なるものがあった。さらにまた学部内の各学科は、前者ではそれぞれ伝統を受け継いで厳然と独立していたのに対し、後者は学科こそあったが伝統はなく相互の壁はきわめて薄いものであった。このように種々の点で対蹠的環境をもつ2個の学部において同時に同質の学生が教育を受け、同じ条件のもとにエリートとして社会に送り出される場合、これらの青年の足跡にどんな相違が見られるであろうか。これは興味ある研究課題である。

爾来35年既に2,799名(内分校204名)の卒業生が実社会に25~35年の足跡を残しており、検討資料には事欠かない。筆者の属する土木の分野で見ると、第二工学部の卒業生には技術行政官として、優れた管理能力を発揮した人が多かったように思われるが、このことは千葉の雰囲気と無関係であるとは思えない。分析は土木・電気・応化等専門分野別、また研究上あるいは技術上の業績、社会的活動、管理者能力等活動度別、その他種々の観点からなすべきであろうが、二度と行い得ないこの貴重な実験の結果を詳細に分析評価することは、今後の工業教育の在り方を考える上に参考になる点が多いと思われる。

つぎに生産技術研究所についてみるに、当時の研究所は一般に単一目的で規模は小さく、所員は学部教育の経験はなぐただ一筋に研究課題を掘り下げるのが普通であった。ところが生産技術研究所は第二工学部の転換であったために、学部的雰囲気と育った専門のかかなり広くばらついた多数の所員をもち、各自、常時は基礎的研究に従事し必要に応じある目的のもとに集まるといふ研究体制がとられた。これは多くの面で在来研究所とは対照的であり、したがってその必要性が一般に理解されるまでにはかなりの年月と実績を要した。この30年間に研究所が生み出した成果については、いろいろな見方があると思われるが、しかし、他の単一目的研究所とは異種の成果を生み出したことは確実である。宇宙開発・地震防災・公害防除等における業績は、この研究所でなければ生み出すことはなかったであろう。工学研究に対する社会の要請はますます多様化し、固定観念による研究体制のみではこれに應ずることは難しい。今後はいろいろの形の研究体制を必要とするであろう。苦惱の中から生まれた体制であったといえ生産技術研究所は従来の型を破ったものであり、その効果はこの30年間の業績となって現れている。その過去の歩みを分析し、この体制のもつ意義を明らかにすることは工学研究の在り方を考える上に極めて有意義なことである。

今ここに生産技術研究所創立30周年を迎え第二工学部以来の迂余曲折をふり返るとき、その経過を分析し将来のよりよい教育研究体制作りに役立てることは決して意義なきことではないと思われる。